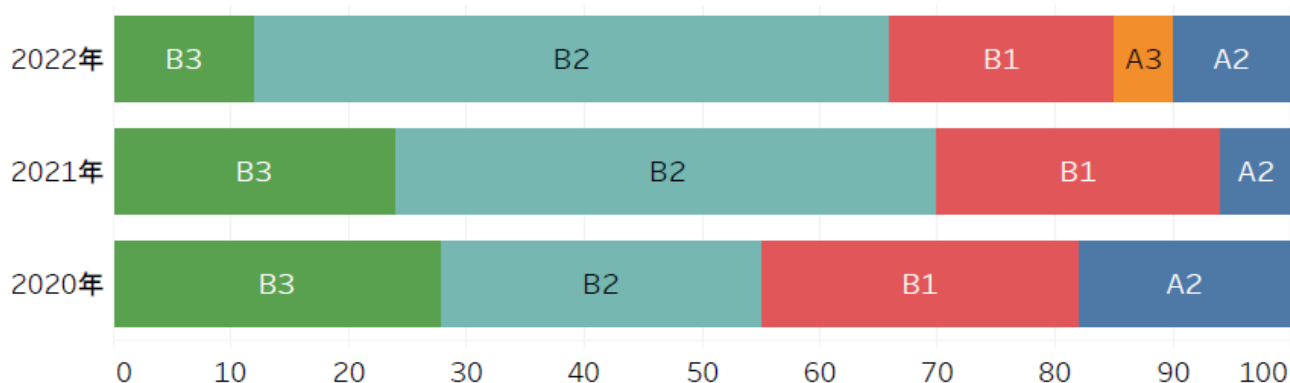


2022年 市川 算数（第1回）

各年の第1回入試の思考コード別出題割合は次のようになります。論理的思考力・応用力が求められる思考コードBの問題が中心となります。B3の出題割合が減り、B2、A2、A3が増えています。非常に重たい問題が並んだ2021年と比べると問題難度は下がったと考えられますが、変わらず高い思考力が求められる問題が出題されています。



例年同様、大問1が計算・一行題、大問2以降が大設問の構成でした。大問1(1)は、「2022」が登場する計算です。「 $2 \times 3 \times 337 = 2022$ 」は頭に入れておきましょう。(2)は確実に得点し、(3)は最初に入っている水量が不明のニュートン算です。ここも確実に得点しておきたいです。ニュートン算は、毎年どこかで出題されるので、必ず見直しておきたい単元です。(4)は、手がかりが見つけづらく差がついた問題と思われます。長方形の平行線を活用して、補助線を引くことで錯角を利用することができますが、筋道が立たなければ後回しにする判断力が求められました。

大問2では、今年も作図が出題されました。正方形の対角線に注目してADの動きを追っていけばハードルは決して高くないと思われます。(2)は、計算が多く、ミスを誘発しやすい問題です。左右対称となる形に注目して、落ち着いて取り組む必要がありました。大問3は、3種類の食塩水を混ぜる問題でした。(1)は得点できたとしても、(2)、(3)では応用的な思考力が問われたため、差がついたと思われます。

大問4は会話の誘導に乗って思考を進めていく問題でした。使う数が「0~9」の9個である点に目を向けると、A~Iの和が「36~45」であること、また、3個の数の和は「 $0+1+2=3$ 」~「 $7+8+9=24$ 」であることがわかります。これらの点に注目することで、3個の数がしぼりやすかったと考えられます。ア~ウは確実に得点しておきたい問題です。大問4に続き、大問5も誘導に乗っていく問題でした。(1)はルール把握の問題であるため、確実に得点しておきたい問題です。(1)から数の並びの規則を読み取ります。一の位が「1、5、7、3」と「2、8、6、0」となる場合に注目します。このとき、(1)で登場しなかった「4」と「9」を操作した場合を調べることがポイントです。

誘導に乗りながら丁寧に調べる力が求められる大問4、5で差がついたと思われます。あくまでも予想ですが、大問1(4)、大問2(2)、大問3(3)、大問4ク、大問5(2)(3)が取れなかったとしても7割に達することができると考えられます。限られた時間を有効に使うためにも、問題の取捨選択が大切です。